

僕の脳裏から離れない

運悪く、それが満員になり、へし合い、おし合いで、腹はへるし、まあ、なんとつらい事。

バスは遅れ、一時四十分の急行で家につく。

京太は、またもや、スキー中止で、

おやつを広げていたが、それを分け、僕ももらった。

腹が減ってたので、格別。

その後、もちを十個焼いてもらい、

九つ食べて、一つは、おばあちゃんに食べてもらった。

英会話テープの用意をし、

下の居間へ下りると、三時、宇治川の土手へ、絵を書きに行くことにした。

大変、うす暗く、今にも雨が降りそうだった。僕の今の心の中そのものだ。

今朝、三条京阪バス停に、あの子がいた。

他の女生徒たちと一緒にバスを待っている。同じ電車に乗っていたのにちがいないが、どの車両だろうか。

絵を書きながら、

僕の脳裏から彼女が離れない、なぜだ。暗くなったので、配色は今度にし、家に帰る。